

教員の歴史及び社会的な側面

前回（3回）は、教職の公的な側面を、国や都道府県の「期待する教師像」という側面から見てもらいましたが、今回はその続きで、社会において期待される教師像を、歴史や社会学的な側面から考えてみたいと思います。

皆さんの中には、そんな公や社会の期待より、個人の好みの方が大事だと考えている方も多いと思います。確かに個人的な好みは大事ですが、教職というのは公の職であり、社会的な機能を果たし、その為に社会的に認知されているものです。教職に就きそれで報酬を得る以上、社会的な側面は無視できません。自分の好きなことだけしてお金を稼ぐというわけにはいきません。

まず、教員の歴史ですが、日本では近代社会が成立し、学校ができた明治の時代から、教員になる人の出身階層や価値観はある特質があり、それが現在にも影響を及ぼしています。その延長上に教員志望の皆さんがいます。

資料4-1（佐藤晴夫『教職概論』）には、明治以来、類型でいうと、「師匠的教員」（「人格主義的教師像」）→「士族的教員」→「師範的教員」→「小市民的教員」と移ってきていることが説明されています。

さらに教職観の観点からは、「聖職者としての教員」、「労働者としての教員」、「専門職としての教員」という区別も説明されています。

あなたは、このような歴史的な教員像から、どの側面を特に受け継ぎたいと思っていますか。それを考えてください（課題1）

次に、授業資料4-2、宮澤康人「学校を糾弾するまえに一大人と子どもの関係史の視点から」を見てください。

学校の教師—生徒関係の原型が、徒弟制の親方—徒弟関係にあったことが示唆されています。徒弟制では、親方は仕事をして、弟子はその後ろ姿を見て学びました。学校の教師と生徒の関係へ移行する過渡期がこのバウンズの絵だということでした。

学校では教師が仕事をせず（模範を示さず）、生徒に向きあい、教えようとし、しかし模範も示さず、教えようとするのはかなり無理なことではないか、

それが現代の学校問題の原因、「教師の役割の難しさ」ではないかと言っています。教師はどこを向くべきかを考えてください。

第3に、授業資料4-3、向山洋一『授業の腕をあげる法則』(明治図書、1985)を見てください。教師に必要なのは、子どもへの思いやりでしょうか、それと高い教育技術でしょうか。教師に要求される専門職とは何でしょうか。

「教育技術は多少劣つても思いやりのある教師」を目指しますか、それとも「思いやりは少なくても、高い教育技術をもった教員」を目指しますか (課題3)

第4に、資料4-4 (清水義弘「現代教師のカルテ」) を読んでください。これは1989年と少し古いものですが、現代の教師にも当てはまるものはあるかもしれません。

「教師は子ども社会に安住する」「教師はお互いに競争しない」「教師は教えるが、学ばない」「教師は人生を語らない、語れない」「教師は教室の中の子どもしか知らない」と、教師に対して厳しい評価、戒めを書いています。皆さんの目指す教師像が、このような狭いものでないことを願います。

今回は、教員の歴史や社会的な側面に関する記述を4つほど読んでいただきました。

そこから、課題は、以下のようなことです。1~4のうち、いくつか(1つでも、2つでも、3つでも、4つでも) 答えてください。

- 1 どのような教師の(歴史的な)タイプを受け継ぎたいですか。
- 2 (徒弟制の親方のように)、教師は子どもにどのような姿を見せればいいですか
- 3 教師として「思いやり」と「高い教育技術」のどちらを目指しますか?
- 4 清水「現代教師のカルテ」に、現代の教師は当てはまりますか?

解答(コメント)は200字~1000字程度で、KCNの「課題 提出」の欄を通して、(武内)に送って下さい。

(欄の中に書き込んでも、別にワードで書き、それを添付して送っていただいても結構です)